

令和5年度 学生支援事業活動報告書

1 活動名

令和5年度日本赤十字社北海道支部災害救護訓練 避難所運営協力

2 指導教員：日本赤十字北海道看護大学 教授 根本 昌宏

参加学生：4年生6名

3 要旨

令和5年9月27日～29日の3日間、日本赤十字社北海道支部において令和5年度赤十字災害救護訓練が行われた。北海道内9病院が札幌に参集し、感染症の発生や多様化する災害救護活動等において、必要な知識・技術を身に付け災害への対応能力の向上を図ることを目的とした。本学からは4年生6名が訓練の演習時の避難者役、傷病者役として参画し、避難所に見立てたエリアにおいて演技を行うことで、各病院の救護班の実動演習に関わった。学生は、避難者役を演じながら、避難者として支援者に情報を伝えることの難しさ、避難者としての孤独感も感じていた。クロノロジー、無線、J-SPEEDの入力など実践的な演習についても学生は一緒に演習に入った。

学生は、最初は戸惑いながらも知識をフル活用して災害医療の一端を実践し、災害看護で学んでいた内容を確認する機会になったこととともに、赤十字だからこそ学べる看護を実感した。

令和5年度 学生支援事業活動報告書

- 1 活動名：第13回 日本赤十字六看護大学学生交流会
- 2 指導教員：日本赤十字秋田看護大学 看護学部 准教授 齋藤 貴子
参加学生：看護学部2年生2名
- 3 要旨
 - 1) 日時：令和5年9月17日(日)、18日(月)
 - 2) 場所：日本赤十字看護大学広尾キャンパス
 - 3) 目的
同じ志を持つ赤十字の看護学生と共に、赤十字の7原則について理解を深め、災害看護において、それぞれの大学で看護学生として学んだ事を基に自らの心身を守る方法について考え学びを深める場とすると共に、他大学との交流の場とする
 - 4) 目標
 - (1) 六大学の交流を深める
 - (2) 災害時に自身の心身を守る方法について述べる事が出来る
 - (3) 災害時に心身を守る方法について具体的にイメージする事が出来る
 - 5) 活動内容
 - (1) 大学紹介と自己紹介
 - (2) 災害時を想定した事例を用いた物品ゲーム
 - (3) 東京都支部の講師による防災の講義
 - (4) 非常食の試食
 - (5) 目標に合わせたGW
 - 6) まとめ
2日間を通して、六大学間での交流を行うことが出来た。具体的には、災害に関する講義を何年次に受講するのかということや、各大学が行っている防災活動についての意見交換などの交流ができた。地域による違いが実に興味深かった。目標である、災害時の心身を守る行動についても、意見を出し合いながら有意義なグループワークができ、目標の達成に近づくことが出来た。非常食の試食では、災害時に食べるであろう物の味などの性質を知ることが出来た。この、六大学交流会を通して災害時のスキルの全体的なレベルアップを行うことが出来た。

令和5年度 学生支援事業活動報告書

1 活動名 第13回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2 指導教員：日本赤十字看護大学 教授 川崎 修一

参加学生：日本赤十字看護大学さいたま看護学部 3名

看護学部 8名（スタッフ含）

3 要旨

2023年9月17日（日）

この日はまず、お互い初めて出会ったため、各大学の紹介をスライドで行った。日本赤十字看護大学広尾キャンパス、さいたまキャンパス、日本赤十字北海道看護大学、日本赤十字秋田看護大学、日本赤十字豊田看護大学、日本赤十字広島看護大学、日本赤十字九州国際看護大学の順番で発表し、それぞれの大学の周辺の地域のことや大学の魅力などについて発表し合うことができた。その後、はじめに分けられたグループごと（A～Fグループ）にアイスブレイクとして自己紹介すごろくを行った。特に、行きたい科は何か、夏休みの思い出、好きな芸能人、好きなアニメの話などで盛り上がった。

アイスブレイクが終わると休憩を挟み、物品ゲームをした。グループワークでの設定が発表され、その設定に応じて必要な物品を早い者勝ちで5つ選ぶというゲームだった。設定は、12月の9時半に地震が発生し、10時頃に体育館に避難。家族は4人家族で子ども2人がいて、父親は道中にガラスの破片によりふくらはぎに切り傷を負っていた。初期物品は、1.5日分の食料、お薬手帳、身分証明書、水2リットル×6本、全員ダウンジャケット、スニーカー、毛布2枚であるという設定であった。それぞれのチームによって、設定状況を考えるところから話がスタートしたチームや、物品を選びながら状況も考慮するチーム、新聞紙があったのでそれを組み立ててテントを作ったチームなどそれぞれ特色があった。北海道の人がいたチームは寒さ対策を中心にしていた。また、ダンボールで簡易トイレをつくったチームや、ダンボールを椅子にしたり机として利用したりしていたチームもあった。

Aチームでは、まず簡易トイレが必要だと考えた。その次に懐中電灯、ダンボール、新聞紙、ビニールシートを選んだ。懐中電灯は、ポータブルソーラー充電器で手動でも動かせるものだった。手動だと結構重く電池も乾電池とは種類の異なるものだったため、事前に準備しておく必要があると思った。ダンボールは、パーティションにしてもよいと考えていたが、思った以上に小さかったため解体して枕にしようとしたり、食事をするときは机にしてもよいと考えた。新聞紙は2枚羽織ると意外と温かくて驚いたので使用できそうであった。また、ビニールシートは毛布より風を通さないため温暖効果があることを発見し、床に敷いたりパーティション代わりにしたりできると考えることができた。

このように、チームで話し合いそれぞれの知識を組み合わせると気づきがあって面白かった。実際災害時に使えるアイデアなども学べたので今後に活かせる

そうだ。

2023年9月18日(月)

最初に、昨日の振り返りを行った。昨日出たアイデア以外での災害での避難時に使用できる物品(新聞紙や段ボール)の工夫方法を学ぶことができた。

次に、日本赤十字社東京都支部 事業部救護課 若松様に、災害について講義をしてもらった。災害に備え、平時からどのようなことができるのか、災害時にどのようなことが外や家の中で起こるのか、災害が起きた時にどのように行動するべきかを中心に学んだ。災害への備えでは、家具の固定や防火カーテンといった生活の中でできることや、非常食の種類で紹介で普段から定期的に非常食を食べ入れ替えながら備蓄する方法のローリングストック法を学んだ。ローリングストック法は、日常的に食べ入れ替えを行うため、自分の口に合う非常食を見つけられるのもメリットだと分かった。災害時に起こることは、火災、倒壊、津波、浸水、土砂崩れなどである。それらに巻き込まれないために、避難情報が出たらすぐに避難すること、大雨や洪水時などには山や川に近づかないようにすることが大切だと分かった。

お昼ご飯は、ご飯からきな粉餅やクッキーといったデザートまで様々な非常食を食べた。非常食初体験だった私は、思っていた以上に手軽にでき、かつ美味しく驚いた。お昼ご飯では、他大学との交流の機会となり、楽しく過ごすことができた。

最後に、2日間を通して災害への備えで学んだことをグループで共有し合った。大学が北海道から九州まで集まっているため、それぞれが意見を言い合うことで、地域によって、気候や環境が異なることによる災害への備えや意識の違いがあることが分かった。また、1日目の避難所で快適に過ごすためのグループワークを活かし、避難所で一斉にラジオ体操を行うといった身体的ケアや足湯や寝る場所を寝る時間によって分けるといった心理的ケアに着目して意見を様々出すことができた。

2日目は日本赤十字社東京支部の方の講演や1日目のグループワークを活かして、災害の知識や備えについてより深く考えることができ、グループとしても個人としても多くの学びになった。

令和5年度 学生支援事業活動報告書

- 1 活動名 第13回 日本赤十字六看護大学学生交流会
- 2 指導教員：日本赤十字看護大学 さいたま看護学部学務部長、喜多 里己
参加学生：さいたま看護学部、3年生2名、1年生1名

3 要旨

〔1日目〕最初に各大学の紹介をスライドで行った。それぞれの大学の周辺の地域のことや大学の魅力などについて発表し合うことができた。

グループワークでは、設定（災害時）に限られた物品のみでどのように過ごすかなど、話し合いそれぞれの知識を組み合わせると気づきがあって面白かった。実際災害時に使えるアイデアなども学べた。

〔2日目〕前日の振り返りと、日本赤十字社東京都支部 事業部救護課 若松様に、災害について講義をしていただいた。災害に備え、平時からどのようなことができるのか、災害が起きた時にどのように行動すべきかを中心に学んだ。昼食には、非常食を食べた。非常食は、思っていた以上に手軽にでき、かつ美味しく驚いた。

2日間を通して、災害への備えで学んだことをグループで共有し合った際には、大学が北海道から九州まで集まっているため、それぞれが意見を言い合うことで、地域により気候や環境が異なることによる災害への備えや意識の違いがあることが分かった。

災害の知識や備えについてより深く考えることができ、グループとしても個人としても多くの学びになった。

令和5年度 学生支援事業活動報告書

1 活動名 第13回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2 指導教員：日本赤十字豊田看護大学

講師 長尾 佳世子、助教 近藤 香苗

参加学生：3年生1名、2年生1名、1年生1名

3 要旨

4年ぶりに日本赤十字看護大学広尾キャンパスで対面開催された交流会に、本学から3名が参加した。「災害時に地震の心身を守る方法とは～赤十字の7原則を基に～」というテーマで、コロナ感染症蔓延以前に行われていたようにお互いの大学紹介から始まり、準備されたグループワークを実施した。これにより、災害発生時に自分たちがどのような場所や状況にあっても落ち着いて適切な行動ができるよう知識と技術を得ることができた。また、昨年までオンライン上でしか面識のなかった各大学の学生と直接会ってコミュニケーションを取り、情報交換することができた。他大学がどのような自治会活動を行っているか知る機会となり、本学でも取り入れて自治会活動の活性化を図りたいなど、意気込みが聞かれた。

今回、日程調整など難しく参加者が3名と少なかったが、交流会は学生の自主性を促すうえで有効な活動であり、今後も積極的に参加できるように支援していきたい。

令和5年度 学生支援事業活動報告書

- 1 活動名 第13回 日本赤十字六看護大学学生交流会
- 2 指導教員：日本赤十字広島看護大学 教授（学生支援委員長）中信 利恵子
参加学生：3年生4名、2年生1名、1年生3名
- 3 要旨
日程：令和5年9月17日～18日
場所：日本赤十字看護 広尾キャンパス
テーマ：災害時に自信の心身を守る方法とは～赤十字の7原則を基に～

（1日目）

互いの大学や地域紹介を行ったのち、被災で避難した家族の事例をもとに、電気・ガス・水道が止まった避難所生活の中で救援物資が届くまでの間、いかに工夫をして快適に過ごすことができるかのシミュレーションをグループに分かれてゲームを行った。

（2日目）

2日目はまず、日本赤十字社東京都支部 事業部救護課より講義があり、災害に備え、平時からどのようなことができるのか、災害時にどのようなことが外や家の中で起こるのか、災害が起きた時にどのように行動するべきか。各災害の時に気を付けなければならないこと、注意すべき項目を学んだ。

お昼ご飯では、非常食を食べ、他大学との交流の機会もすることができた。午後からは、2日間を通して災害への備えで学んだことをグループで共有し合った。北海道から九州まで集まっているため、それぞれが意見を言い合うことで、地域によって、気候や環境が異なることによる災害への備えや意識の違いがあることが分かった。